

大正から昭和中期における建築家の言説にみる住宅論の変遷

正会員 ○ 吉田孝司 \*  
同 日置英貴 \*  
同 近藤正一 \*\*  
同 姜 涌 \*\*\*  
同 若山 滋 \*\*\*\*

【序論】 一般に言語活動というものは時代を超えた流れの中にあり、建築家(評論家を含む)の言説を探ることは、その時代の建築界の時代思潮を明らかにするだけでなく、現在の建築論を理解する上でも、重要な意味を持つ。本研究では研究対象を大正初期から昭和中期における建築家の住宅観が現れている評論に絞り、当時の建築界における住宅論の変遷を分析することによって、戦前から戦後にかけての住宅思想の骨格を明らかにする。

【研究対象】 対象期間を建築家が評論を著し始める大正初期(1913年)から、戦争中表面化しなかった建築思潮が戦後再び盛り上がりを見せる昭和中期(1955年)とする。対象文献を当時を代表する建築雑誌であった『建築雑誌』・『建築と社会』・『新建築』・『建築文化』・『建築世界』とする。その中から建築家によって主に住宅論が著されている評論を抽出する。この結果、対象とする評論は242となる。

【研究の方法】 1)対象とする評論の中から筆者の住宅論に対する建築観が明確に現れている部分をキーセンテンスとして抽出し、そこからキーワードの選定を行う。2)キーワードはカテゴリー1を段階的にふまえた上で18種類のカテゴリー2へと分類される。3)各カテゴリーの頻度とキーワードの特徴から住宅論に関するムーブメントを統計的かつ内容的に考察する(図-1)。4)ムーブメントの相互関係をふまえた上で当時の建築界における住宅論の変遷をみる。

【カテゴリーからみた住宅論の変遷】 大正、昭和中期の建築家の住宅論についての各カテゴリーの推移及び主要テーマを考察すると以下のことが言える。1913年から1925年にかけては、主に住宅衛生、耐火・耐震、建設費節約といった現実的な問題や外観美、椅子・畳など趣味的な問題が論じられた。しかし関東大震災後に論調に変化が現れる。機能主義を基に住宅機能の合理化、生産の能率化が叫ばれ最小限住宅やアパートを積極的に論じるが、一方ではユートピア・浪漫的な思想がみられ、近代都市や機械などによる疲弊から自由や自然を求めコンクリートや都市的なものを否定している。1932年以後は満州事変から第二次世界大戦に向かう過渡期にあり、多彩な論を展開した。外国人建築家の登場によって構成主義

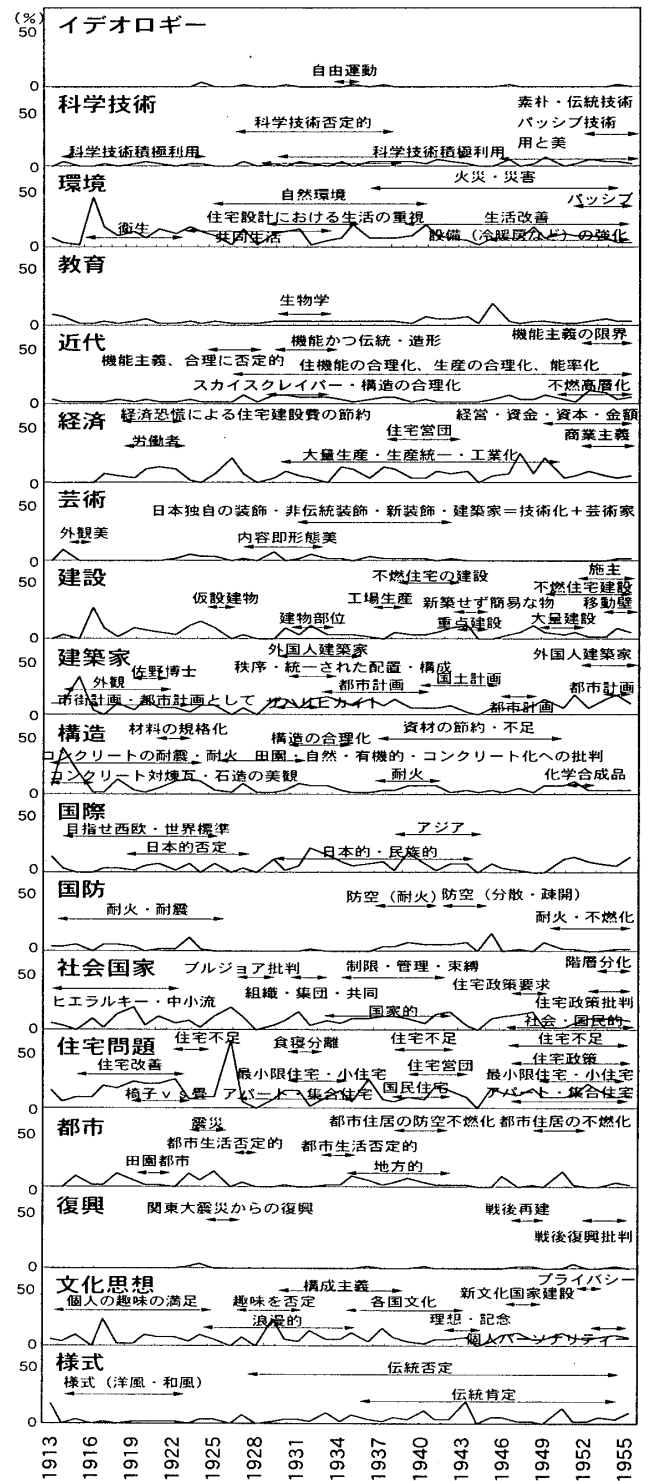


図-1 各カテゴリーの指摘割合と主要テーマの経年推移

The change of view of houses on discours of architects from Taisho term,until the Showa middle.

的建築、表現主義的建築、スカイスクレイパーなどが論じられ、また民族的な文化や伝統を重視する論、機能近代的かつ伝統支持論が並立し、さらにアパートは「すべての人に日光と空気と家を」という言葉で代表されるにユートピア的な住居としてとらえられている。1937年を過ぎると住宅論の内容にも国家意識が強くなり、防空のための耐火、住宅営団による国家的住宅管理などの他、伝統や民族に関する論が多くみられる。1943年になり終戦が近づくと都市計画的な住宅の疎開・分散や、資材不足を原因に重点建設などの節約が叫ばれる。1946年からは戦後復興の住宅建設期となり、不燃化住宅・高層住宅の建設や社会的な立場から住宅政策の必要性が論じられる。またその他に冷暖房などの機械設備が重要視される。1950年以降住宅政策への批判に変わり、プライバシーやパーソナリティーの重視、伝統的技術の使用や自然換気法などのそれ以前の建設的な機械設備に対してパッシブな設備環境利用といった多彩な論がみられる。そして1953年を過ぎると論は更に多様化していく(図-2)。

【結論】 大正期においては、文化水準、生活水準を高め近代化を進めることが住宅思潮の主流であったが、この潮流は経済恐慌、関東大震災を契機として変化する。しかしその変化は単に経済的や安全性といったものに向かうのではなく、人間的、文化的欲求といったより豊かなテーマに向かうもので、ヨーロッパからのモダニズム思想の流入と相まって、機能主義と、自然環境や人間性を重視する理想主義との葛藤、対立までに至っている。そのことは、この時代に生きた建築家自身が、住宅創作にその両面性を追求したことを意味していた。そういった動きは大戦に向かうにつれ、民族・伝統思想と結びつきながら収束するが、戦後、様々な思想や建築観として再び顕在化し、今日に至るまでの我が国の住宅論の根底をなしている。

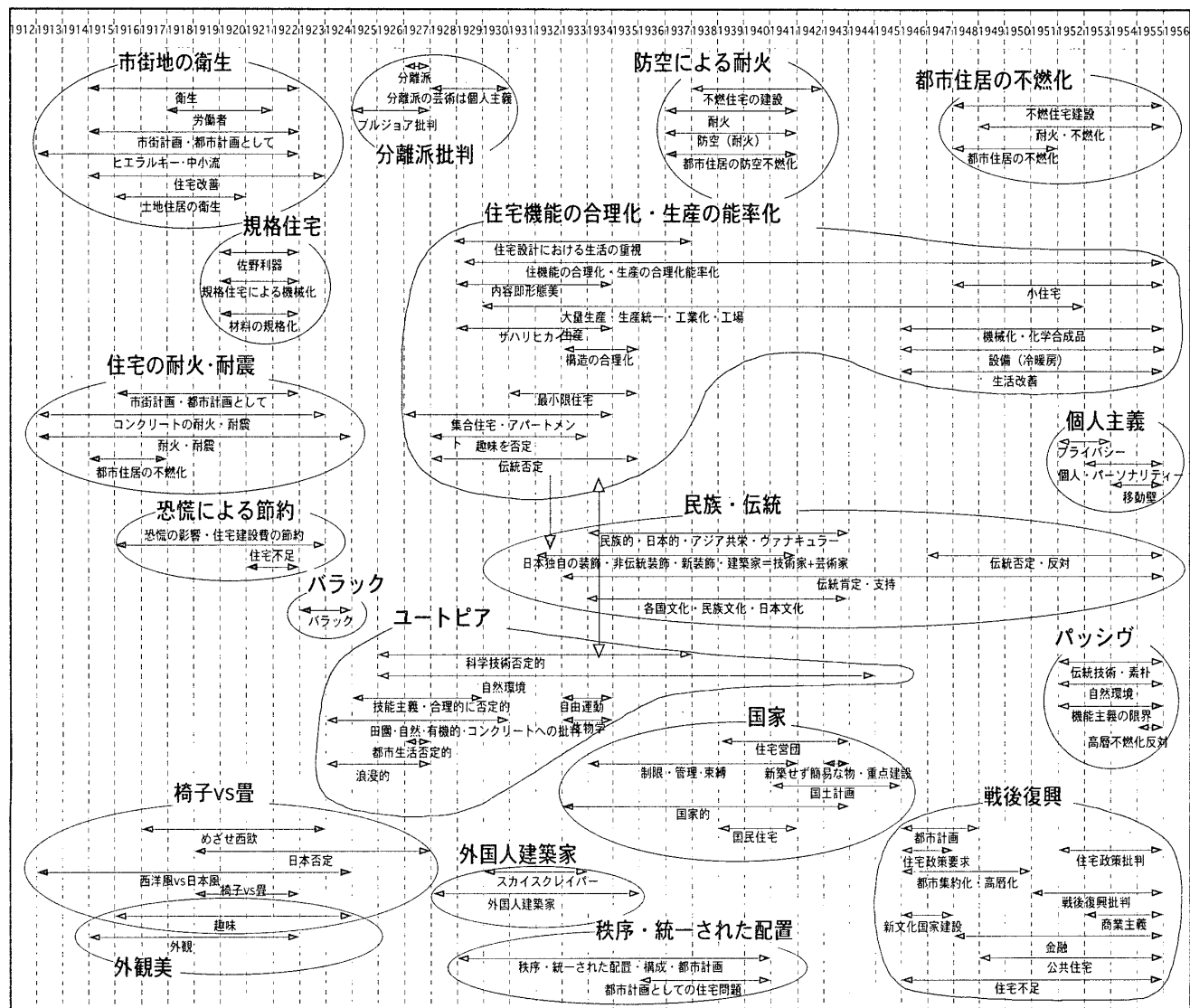


図-2 ムーブメントの相互関係から見る住宅論の変遷

\* 名古屋工業大学大学院博士前期課程

\*\* 名古屋工業大学助手・修士(工学)

\*\*\* 名古屋工業大学大学院博士後期課程・修士(工学)

\*\*\*\* 名古屋工業大学教授・工学博士

Master's course, Nagoya Institute of Technology  
Research Assoc., Nagoya Institute of Technology, Master Eng.  
Dr.'s course, Nagoya Institute of Technology, Master Eng  
Prof., Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng